

「望雲騅馬歌」の「分頭太高／擘廻頭頂難轉」の例を引く。

『白氏文集』<sup>0863</sup>「初貶官、過望秦嶺」に「望秦嶺上回頭立、無限秋風吹白鬚」の句が、又、「1232 馮閣老處見興嚴郎中酬和詩因戲贈絕句」に「乍來天上宜回淨、不用廻頭望故山」の句が見える。

『菅家文章』は次のような用例がある。

「4 賦得赤虹篇、一首」舉眼悠悠宜雨後、廻頭眇々在天東

「127 典儀、禮畢、簡藤進士」廻頭曉望紫微宮、百辟星前再拜風

「215 早春閑望」廻頭無外物、漁叟立沙村

「216 正月二十日有感」廻頭左右皆潮戸、入耳高低只棹歌

8 斗杓…斗柄。北斗七星の第五から第七に至る三星。

「春秋緯運斗樞」に「第一天樞、第二璇、第三、第四、第五衝、第六開陽、第七搖光、第一至第四爲魁、第五至第七爲杓、合而爲斗」とある。

川口久雄氏は補注で

「北斗七星のうち、第一星から第四星まで、北斗のますがたの部分を「斗魁」と名づけ、杓子形の部分の第五から第七に至る三星を「斗杓」または「斗柄」という。この斗柄のさす方向によって四時十二辰をさだめるといふ。」と説明する。

(岩波古典文学大系『菅家文章・菅家後集』七三六頁)